十二源氏袖鏡　八

特別
へ12
5031
8

源氏袖鏡 第八

并 のわき

同 みゆき

同 ふちはかま

同 まきはしら

十八 むめかえ

十九 ふちのうらは

源氏

並　野分

野わきまいのうしろわもおそろしく吹いてて
まかれれ小萩もまちえぬ風のおとしきなりた
まへり露もとまらぬ吹ちるまはり萩の上り
ちるさおもし小ぬ給ひて花ともの志らぬとて
打うちみ給ありさ後をこ乃中将君夕霧のは
廊のこしやうしのかたよりのぞき給きちやうも
風乃いたく吹ぬきはまりおやうぬるまた
みよせられいのうちまてみもめづらしき人の御

くちられおほくの山あたりへハもと深くたちかかり
まてまし給ふハたゆかうちなれたまはりけり
ありと云ふもうらおもうしくおかあかりまて
まかハみちて書のおもかのふうもみのまより
かた様乃さ比うれさるを見てうらしきり
よしも鴻うハおもをつる風のをとも中納いお
思し給ひけ給ひりけりおほくのいもさうう
さへのうらを吹おもしてなそきこえハひとを
みられちりせんさいの花乃えさらもいとおしを
なりかうらしてゆくよ風きらしきありけり

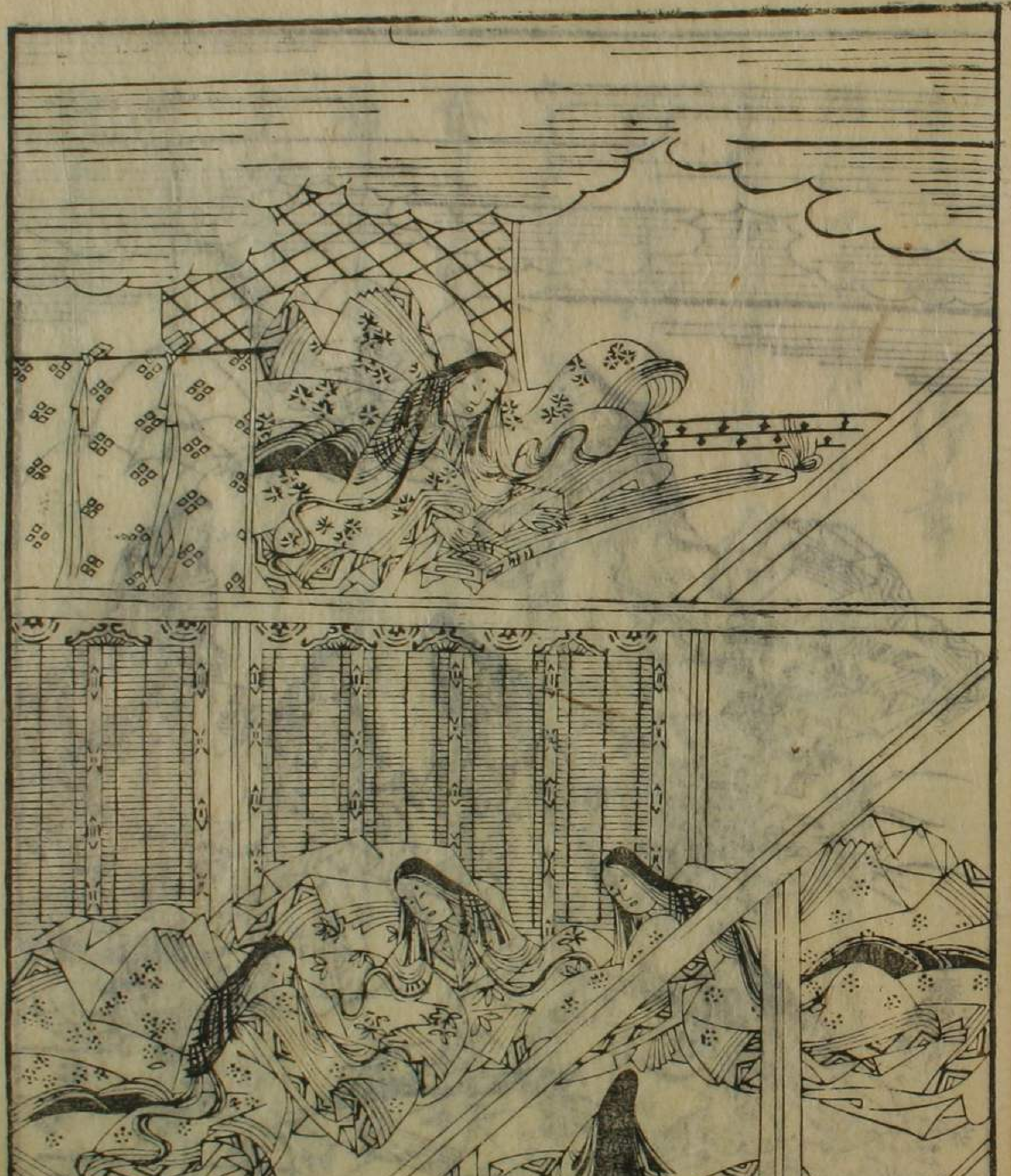
さめのやうよかりおもうりこれハ月華なりけれ
おしさのうま也あさ日ちるやうふきしそておさい
の家もうれへかなりしうきうめさうり日たゝ
くおきまいて流うく風うかうはかりのふ
秋好中宮もせんさいはくかひ給をて山はさうに
六条院や おりしませハよのつねの人さま花のえかう
をあさまうれとおもゆかなましてせんさい中村
の露れものをさうまりてに流心ましひもし
ぬへくおかりうり給まし給うり女房うへかう
いまもせんさいにおかさせ給ていろくのことも

ともにまちてむしのこゑともに露かゝせ給へり
中将の君も御供にまいりて達ハ吹ならし風
もちてうれしきにされハ給へる字ハひとやとおかし
ゆきてうたき
相なり
それより夜の御かへしおもしされハ紀
ちる里けさ物さむなりうちつけもさうや物ち
めひすくまうる給ひこるちもあり又おそ訖川
めてかよまてひきかけてわつさ女房もあか
わりおけよにさちおとおそひつといへり
さわりおけしまきくろハむしろとなり
御く明石の上
の御かへしかうりあふ恋やうのとりきまきこそて
たしちかうめ給へるに源氏の御さきのおほ

こゆ達ハこうちきひき御とりてけちめこえせうり
けちめハ結目いろめやこゑ
きくりこそいへにみつねまれ
源氏もしふつかめて風
の御そうつりひきかりこそつまなく物給へハ明石の上
大かたに萩のちる色風の音もうきなひ
とけにさむしくちしてとひまりうち給ひそれより
あらたの御かへしまゐらせてり中将達ハり
もゆかしく此うれ西けに見んらくまほしくて
みちとやとひきあけてのそき給へてあら
のうちいてそれやうふかおおもひつきとういふ
ちんやうにつふくとうつくしくきゆうかきの助り

さらはこそあはでやうらみてかへらましかり
源氏まことのあはれとの給へ女
吹みだる風のけしきに女郎花しほれ
しぬべき心ちこそすれ　源氏
下露になびかましかば女郎花あらき
風にはしほれざらまし御心もなよやうの
かくはなやかにきこえて女のけはひちかき
昨日の見しきにまちもまさりけれは川へしこれは此
かきのさきにうれしきなりけりかけたかへりける夕
またそふきはらふかへらるるそれよりあらしの

ひめ君へはかり風に押ちらされてはさそ
おほきあかつきはけりちらはらんれはまに咲
うつろふ前の花を作りなしてきさ御
かへる人と心に御せくもおもさりあらん哉
もまさりしハのひらんしとあちさきれく花の
まことの人のうへ風のふかひに文をりく
ては御るまそまうみこはまえみつは
よつそむつきれのうそやうとうおもりてま
みうちそあみくこ御やうまうき紙中将
風さうれむつや御よみ夕きもわすつま



たくまれぬ声にて吹きつくるやうなれ
きくやりけるいもうとのひめ君のひかる君
はとめならよういのくもあかさの風には海
いまはいみしくあやうくしぬよましてなき
ちらしてしかとわらひたり

行幸

同年十二月に大原野へ御かりのため行幸あ
り世おしなへてみさはけは源氏の御かた
めてたくきよらにうつくしくおもしろけれ
を見んとてきんたちとて物見くるまきしろひし乃
りまてひまなしおしよ六条よりは玉鬘もし
のひ給ふ御門の御かたちを見たてまつりてめてたき
まつりけれは　めてたきかな　たてまつりつゝ心さしくへ　は
　うやなり
あはれしくおもひしらるゝとみてまたかりの御よそひ
やさしくわかくもめてたくもあり太政大臣の御けしき

れいさ地なまゐりみたまふ雉一えたを源氏
へたてまつりたまふ御使蔵人の左衛門尉御門
雪ふかきをしほの山にたつきしの
ふるき跡をもけふハ〇よ太政大臣のかゝる野の行
幸に御ともつかうまつられける其ためしもありけるにや御返
と御つかひをかしこまりもてなし給て源氏
をしほ山み雪つもれる松はらにけふはかり
なる跡やなからん又の日ハ源氏より玉かつらへ
内侍のかミにまゐらせんとおほしめしけるとありされと
まゐらせさるやう給ふきのふ御への御かへりあれあ

てなほとかれ給てまかりも衣つゝみ御うくハ思ひ
給ひしを御文なりけれハ玉かつら
うちきらしあさくもりせしみゆきには
さやかに空のひかりやハみしこまかなる御返し源氏
あかねさすひかりハ空にくもらぬをなとてみ
ゆきにめをきらしけん猶おほしたて内の御
宮つかへの事を源氏よりあつかり申給内
侍のかミになり給へて氏神の御さんたいにハ
源氏の御むすめなりと人しられ候ハ
るを藤原也されハ春日の神に御こゝろもあ

へしてくやうゐあらて給ふ事を挍仕
のおほくの人むまをめし守給ふにつかはし源
なつしくて大とやの人々よりつかはせこおり
源氏まうての君よりときをよせ給ひて乃
あしゆひよ内の御心を入てまかりてはて
よおやこ乃人々ゐいめんなへきよういたりそ乃
人まれのさめふ三条の大とのやうりみしき
人しやうく内への御こまつる大臣
うちたいひまて中宮をはまうてをわか身を
されぬけこたりたり此方を源氏の御心は

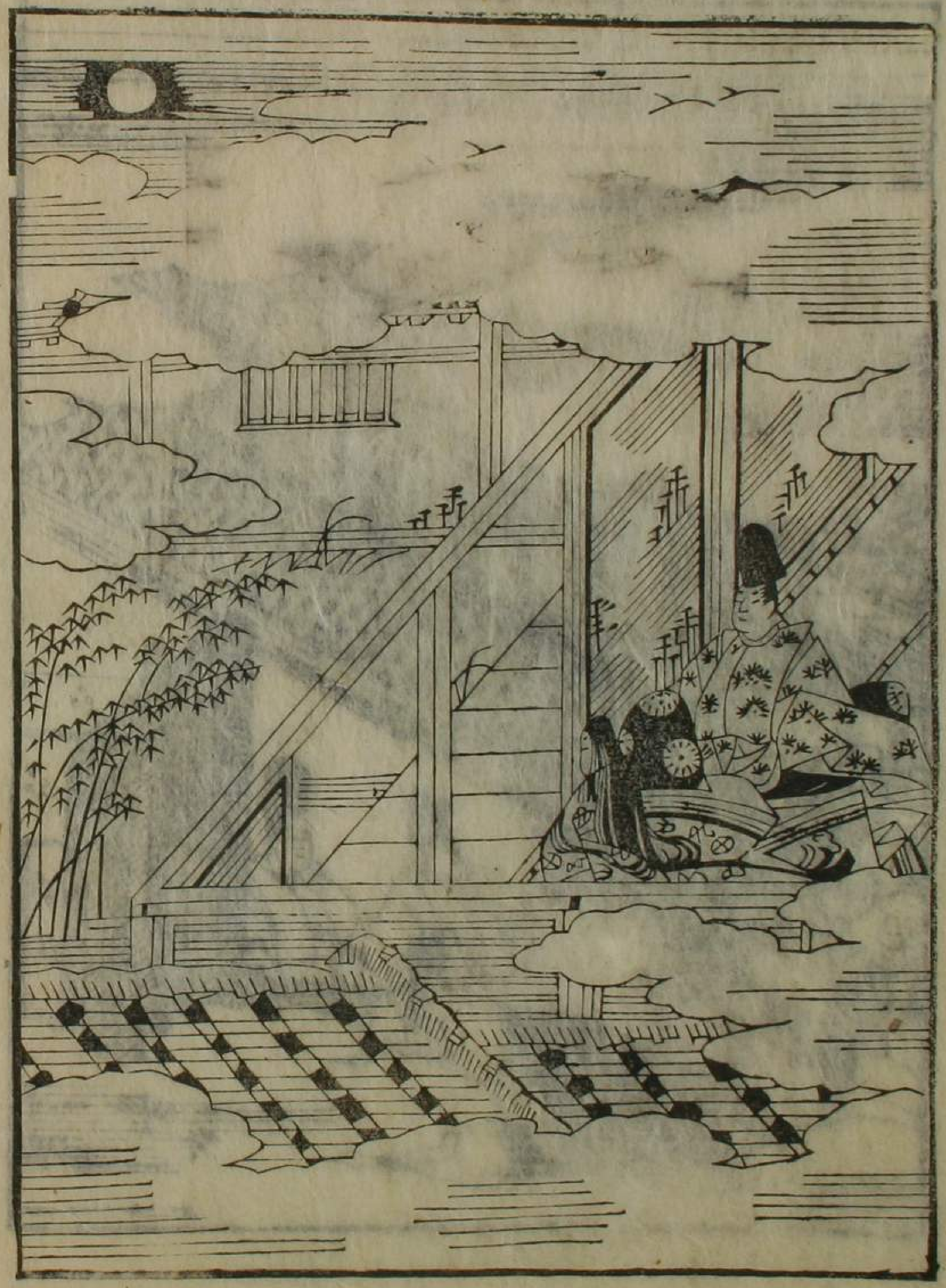
らんしてよく思ふてまいりけれるを御ても
かしこくひとへにひとはやり給ふ桐壺中宮ちり
もみなきけ給ふなおたき物をもまいらせ
けるくらくもころくうしおまゐりけるしよ
もさふの君きて給ふてかさのこと おもくいりろの
きぬきそむすひ物てあなしきさまりたまへり
源氏おはそておさて見んなこゝろきのたま
よふまいの御かきちのうへおわりまつし
いのちうとみられ見達 かの夜君うそ
まさなれきよ忠ふてけ文にかう夜とかへとて

こたこのふたや御けよ源氏の御方へよこし給ひ
たゝこのとまかすりれハこそかくさま源氏
かしこくも又かく衣かへれ給ふとくはゝ
衣かるとよみすゝてまゐらする尺せし給ひて
あるはとかくしかやうにも侍るなるとてま
おはやふかくれ給ひしを かくしきこえん かくかたとも 御もとハ
ぬのさきるれハいゐの時ようちへちてかくとも
はまつしこまち袖あかれそ御ものゝしを返き
ゆひ給ひて御のかく八まかし給ふ内大臣
うちめしやかさ川まゐらぬかくまて給ふ

くれ給ふあまたころよまゐらつかはつかしき
人ものきゝつくいつきしふえきこし給ふて
おほえたるそ源氏
よる人ます　かはるたにきふうちよせく衣
まもるよぬるく川とそみし

并薫中将

この中将は今まては源氏の御子なれは御たう
うと思しめしけるをやうやうおとなしくなりては
いとこたへかたくまてかほりてそのけふ
事よりもと匂ひくおほさて三条の大宮には
まよひくれ給ひしか中将も御そたちありむら
つゝも思ひしける君なれはとみそめきやはまた
給ひけりの花つゝらふの花はまた思ひしるき
をかしまうりなとみそのつましさしらは
て中将



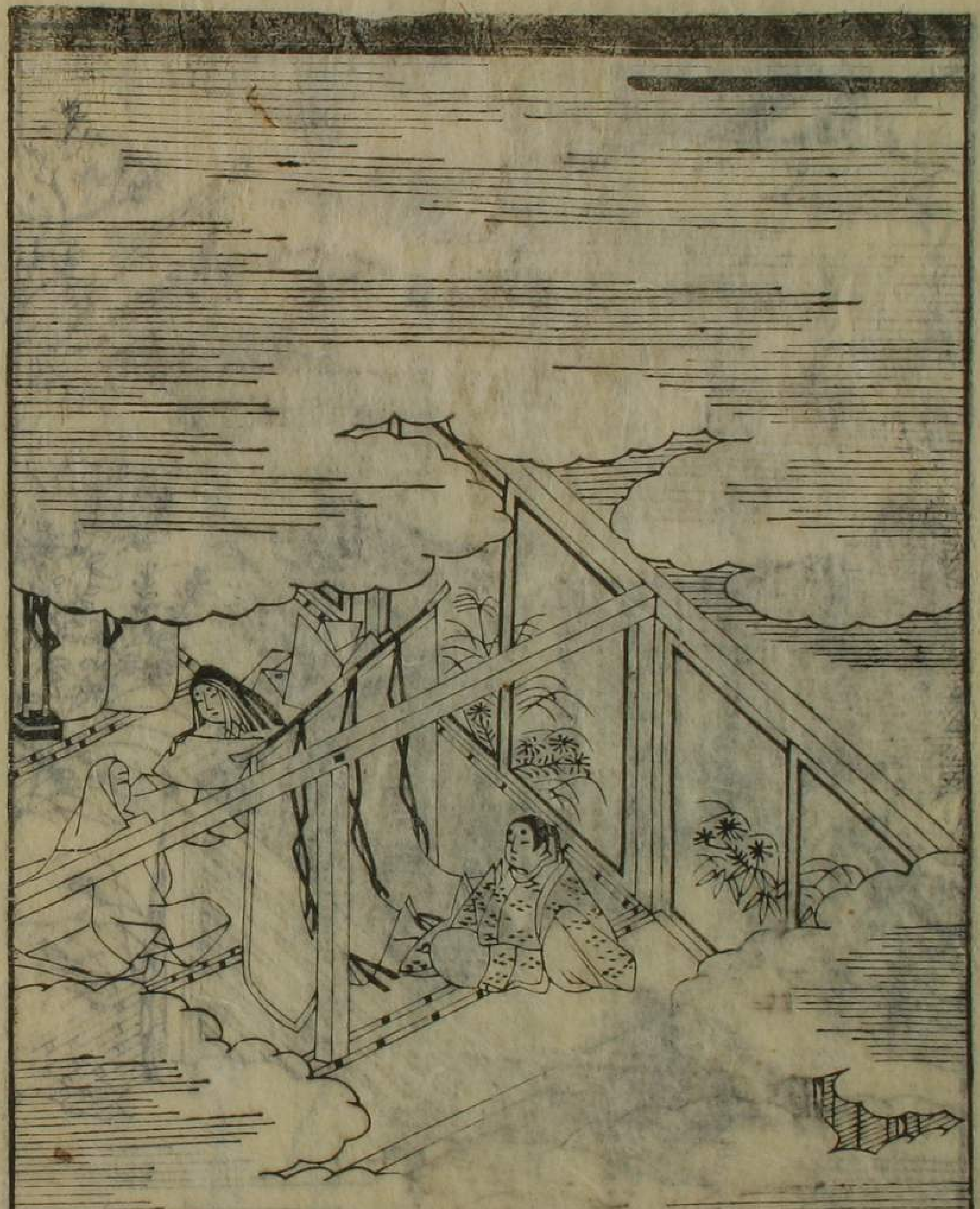
一 むさし野の露とやきえし草の陰あはれ
いけよかとつけ母のもとへ
二 さつめうふちうけき野人の奉すハうを
むさしやかしこう御 まきの石けすゆへに
内乃母くのきんさうれの中ね（ねりしいまのとゝかりんのうこ）
まそハ源氏乃ゆかりとめとて男をはらし給
ひしよ我ゆいすうそあれいきぬれての
ひいたしぬまでといふさや相はて月のおか
き夜さつのけよかされてほうまうひ中ね
いませ山すまるといふきぬてとさの

ちふ娘さましひろゝれを思つゝ
御むひろみちをいちつていませ山をとく
しくされも娘しし此花をまつゝ内
給乃さふかりのまり大まや内の思ふ
うちへまつり給へまてれも此まゝうまへもち
あくすくはいまもしくてことるうるうれゝ文を
ひきるの君大ねうり
三 くそうハいしてもせまし長月よいのちと
かうやらそちうう月さりのさ
たのむきて給へるかくれ文あるかくるりとま

のちのあした大納言のもと
わすれなんとおもふも物のかなしきをいかさまに
してわすれんかたもなきのまよりハむ
きのしきをうちつけてさきそれの君もおと
さてまゐりけれハつらひきこえさせ給ひけるや
秋月さやかにひかりをみくもむさしのゝたけの
君をきゝてもおもハん中ハむかし
こゝろめてひかりもむかふおもひさふおもさと
く君をそのきやハもとり

并　ま木柱

内へまいり給ふべきことはとゞこほりて大将は
玉かつらのかたへおはしつゝめでたり源氏もこゝろ
ならでおほしめすまゝにもおもひの外なる方
のちさらにはおかしく御そはなれ給へともむ
けれとは石山の仏けもいのり給ひとみて
てふさ御たち女乃御さ御をよろこひ給ふなり
くましかりとおほしそさへも御心かきてひろも
くれくいりおまりまれ小のことは雲のうへ
はおほせんさひの式部卿の宮の姫君なり



はゝちゝもまかりぬまそしろものくるまま
つかひ給へるハおそてのかんだちめ君たち
三人うちまゐれハ大将もなんとなくハおほし
なかゝ中もおくれうちまゐれけまへるまにお
もひうつりまへるはくは源氏ハまゐりてとよう
の袖よ給ひ給もくちおしとて源氏
おりたちてくみハさのまもまうり川人の世
ところちさうさわしきを女君もおほえらるれ
ありさ海をおもほしにきつゝくはかくてまゐる
さ川を海まかぬき紀よいてる紙波の
こおのおそときてうん君けきされあちうこれか
ひきくろの大将むくつの流るゝ夜つきせん事
くるしくてさやうくしてひとりうしせく袖の
うちよ川入くるさしめの給ひうるまけさを
していうくうるさまよいとのまふかのうそのを
おうさをうてよりそてもおひをこせ給へ袖の
おりもさけうんゆとの給ひ川合おひて給ふく
よおくろ冬の夜ハ袖のこほりのきけさまあうれ
かのうらうち給へ秋もむかひ出はくへき紙
むかひ出ハ人さしそへいとまうやうの給へハかりいそく
うれもうら河すや

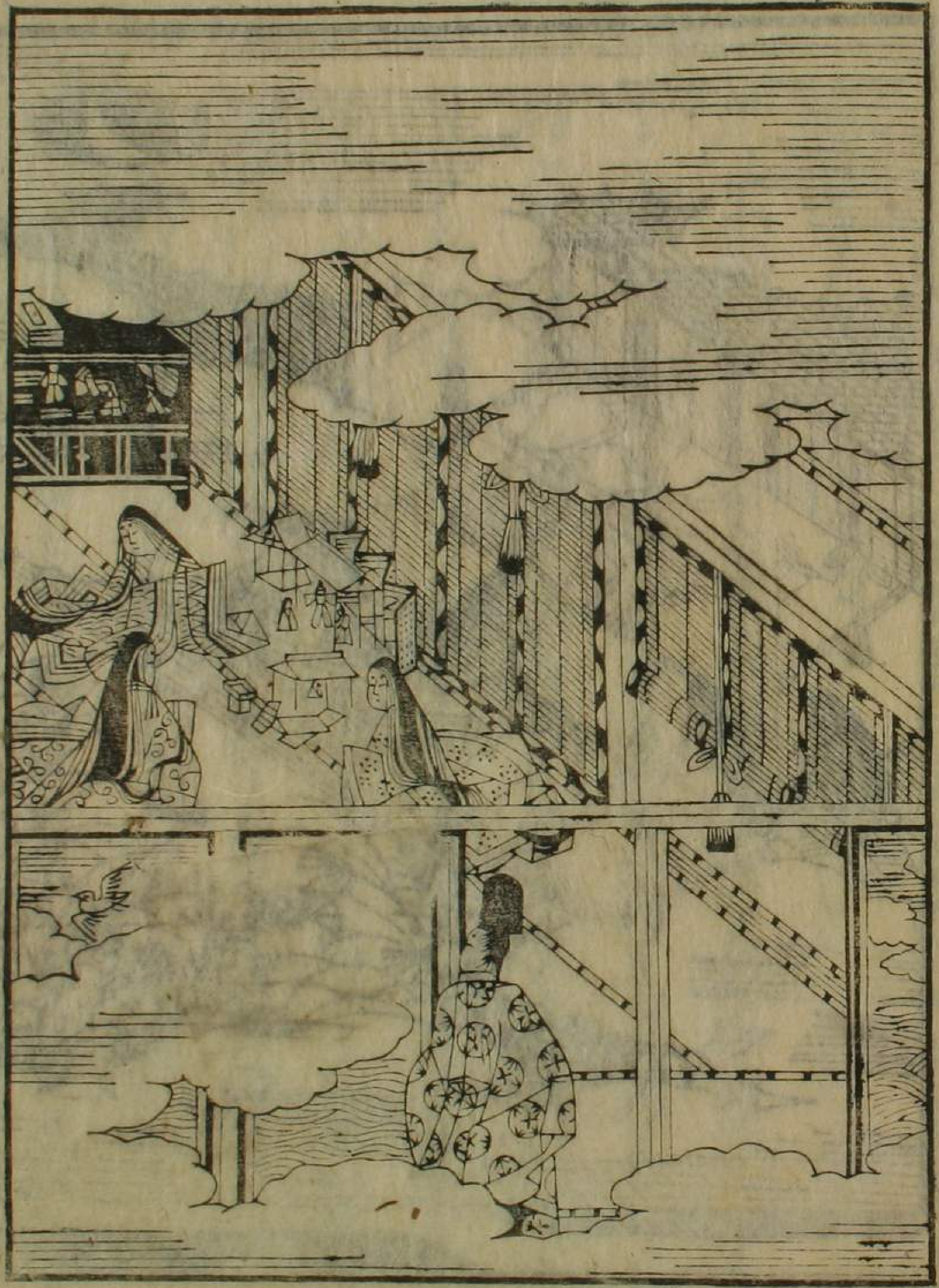
ゆかしとおほしけれとさらにきこえ給はすなり給
つねのことふれたるにおきあかりて火とりをよせ
このまくらよりよりて大将のしろきつまはらにてさと
いきを給て人の見あはせてあさましくさはかれは
こゆるかたちのめもあやなるまても入給はてはかなし
をつまとをりてみちたりそのまゝ御袖の下まて
まて夜ひとよきこえ給ひまことひあかしたまふ
ふきにしひとひすらうとましくなりてつまそ
しきせられ給つゝありてむかへ御文なと給大将
かきく宮にみたれ宮よりにひとりはへ
はかなきさの袖むかへは夜まをさむるに
おきてハ御なやしますし大将にもえまもとなくて
おもひよたまふ袖つゝまつまてもなき君
ひとりのみくるしきむねのうちはきたになひあ
まれなるのそらそらし大将
うきよ給ひさけはいとくるしくふゆかなり
そいしことそのゝち大将は御なやみしくそなり
つき給すこし君もとによりひきうちてみなまゐり給
めのまれけちくむ給まのまゝけふもいはて
とのゆかんことをいはれるものとくりさまとひさまよ

ましきすかたにて、にたるはむかへらりやまふ
おやの御おもひもひとかたならすみえさせ
まいらせんとて、ひとつまつられ給ひて御めのとへ御
せうとの御きんたちおほしけれはいつきかしつきてお
さきの人ともはまつは思ひかけたてまつらん
すし大将の君ならにはひめ君一人おとこ君二
人おはしますとておにむかうの御かたにわかれさせ
給ひけれはいまさらたきとしてかやうの
をひめ君ハかたしくおほせてつかはされける
ひとしきそのかたなりをとうにゆつらせしんて

ひめきみをかきてつしうのひとりのこは
きうしのさたしてよし入まふひめ君
今はとて宿られおもふれなうきまさのせん
しらいまわとかたられ人のみる
なれさとへまいるもたむかうかう三こまつく
きまんのかうそ中将の君とふかのうれ
女房たり
おさけまいり海の大いとこそ御まり
やうけなるたまはくの君と云大将の北方
の人なてこまる

こゝろくもいそ波のぬれもむせかへりけらむ
へくもあまたしぬ世を佐車にのせて宿の木
かけをたちまてたちわつらひておりしつきてあり
ゑみつくはちよりて源氏の君とのやうに心乃
うちとけちまつり大将はやそ故かやの立より
まつりのひつまもみあるとにいるゝ給ふ
え知らぬ君の手よなたりけると八よらりかたちより
車にのせてけり扇をたてまつり給ふもやさしくて
もたされきさ人ハいそしらちり内侍のすけの
をつくあまうちまくらとうちへいきんさ大将の

流るゝ涙おちくらちもえいひなくせそ
そしられて行ことあらみ年まれハその
つれてに内侍のうとうちへまつり給ふ大将よりそ
ひつりと拍むつしくさりきまふちまう善給へあ
文ハ内侍のゆふにきこえひあふにいひなれてむ
うつの流るゝ大将の流るゝよりそ文
み山まよさをうちかへしわかるれよちうく孫
ときまさまきかんの君ハ知りてわかきてい
うかきこしむと知りてよみしけつねひへしもう
世給月のくもるうちまよて源氏の御らくの中を



こひわたる海そこにふかくけつりしあさかきさかへ
ひまふ門
かくてくらゐのひゝきもきこえとゐまは
くるひつめさんひきとうつまされさうとしはし
くうしみをせまふ流うち地りまきかしてみしれ
へんみとくはらち可しくおかきの内侍のうち
いゝまんをゝもうつれちまれをんしてそ
人なそあけま文見えと
そのへよりとみへてハ梅のちるまてかさり
もまちひらしやむゝ

かたみにハ風もはげしくよ花のえにとまらぬ
へきまより見ゆるもうへをうるはしく心ひきて
て大将ハおそてまよひくわう殿へ御まゐりて
よろつをも人にまかせ内より出よろこふ
ゆるされ給源氏の御ところハさそもあへなきやう
し給ふにかへりかんとも心ひとつをきてこゆめ
られてこゝよりも御けはひしく思ひしかり
さゆめるくとハ御さん
してけるぬるくや
御てゝ宮の日おほしあまりて
玉かつらへ御文さしまふ源氏
またなまでのけしき法乃まめよかる宮人

といふことの葉もつゝまてかゝれにこそは姫君
なみたのすゝきにしほれつゝ袖ぬらしてうる
る人と思ふらめや　源氏
さてもたゝそのまゝみち急くらもいまそ
うつる山吹の花又かのこれ御ゆかりをかへし
たちいるなたゝまちまいりてもろく　源氏
おもしきをふかくりしひのみしぬるいかなる
人かまにてきこゆらん　大将はみるかひて女いものゝの
おやなりたにさやかにきこゆるすまし御手てたれそ
この世くのつらなみとるをつねやき姫

ともつらにくしともほにほかにしかりるまこと
そんとて大将
きこられてきすみもあはれなりのことをいふる
またいかのそへきかのとひめきえとてきる
となかしハ今ハあすもの君とてきこえんの此
るなきかひ姫ある時との中将の君あやし
るかきもしあくあすこの君
おきは尋ねる人なきまにたよりてき御さし
よろこびをそへよ中将
よる人なきも風のまにまにそ尋人もなかる

みつそつるひせをとてきるゝなりとや

十八 梅か枝

あかしの姫君ハうらの御もきの事おほしいそく
きせさ給ふてまつり給ふ春宮も同二月に御か
うふりの事あるへけれハやかて御まいりもうちつゝくへ
きにて御もひきのつきり正月のつこもりなれハ
よろつの地あはせ給ふ〳〵あきらかなるか
てまつり給ふたきものてんまゐらせ給ひしに
御かくさんまうのたき物のおほうをあはせ
まふけさせ給ふ御裏にてあはせらるゝ時ハ右
をのちんのみなみ水にほりけるをうつさせ給ひし雪

ゆふくれハ六条の院にてあはせられけれハ河内より
ますゝへてほしのたきものよりもてみきハ
ちくくらつまゐらせ給ひし也二月十日ひやうふ卿の宮
わたらせ給ひけるきさらきにあそひたまひると
こふらひきこし給ひ梅のかをりをめてゝおはする
ところに前斎院よりとてちりすきたる梅の枝に
つけられし文まゐりけれハちりにたる梅を
おつくへ給へるをまゐり給へりくろはうなり
ちんのはこにるりのつほふたつ大きにまろかして
いれまゐり給ひしを前斎院

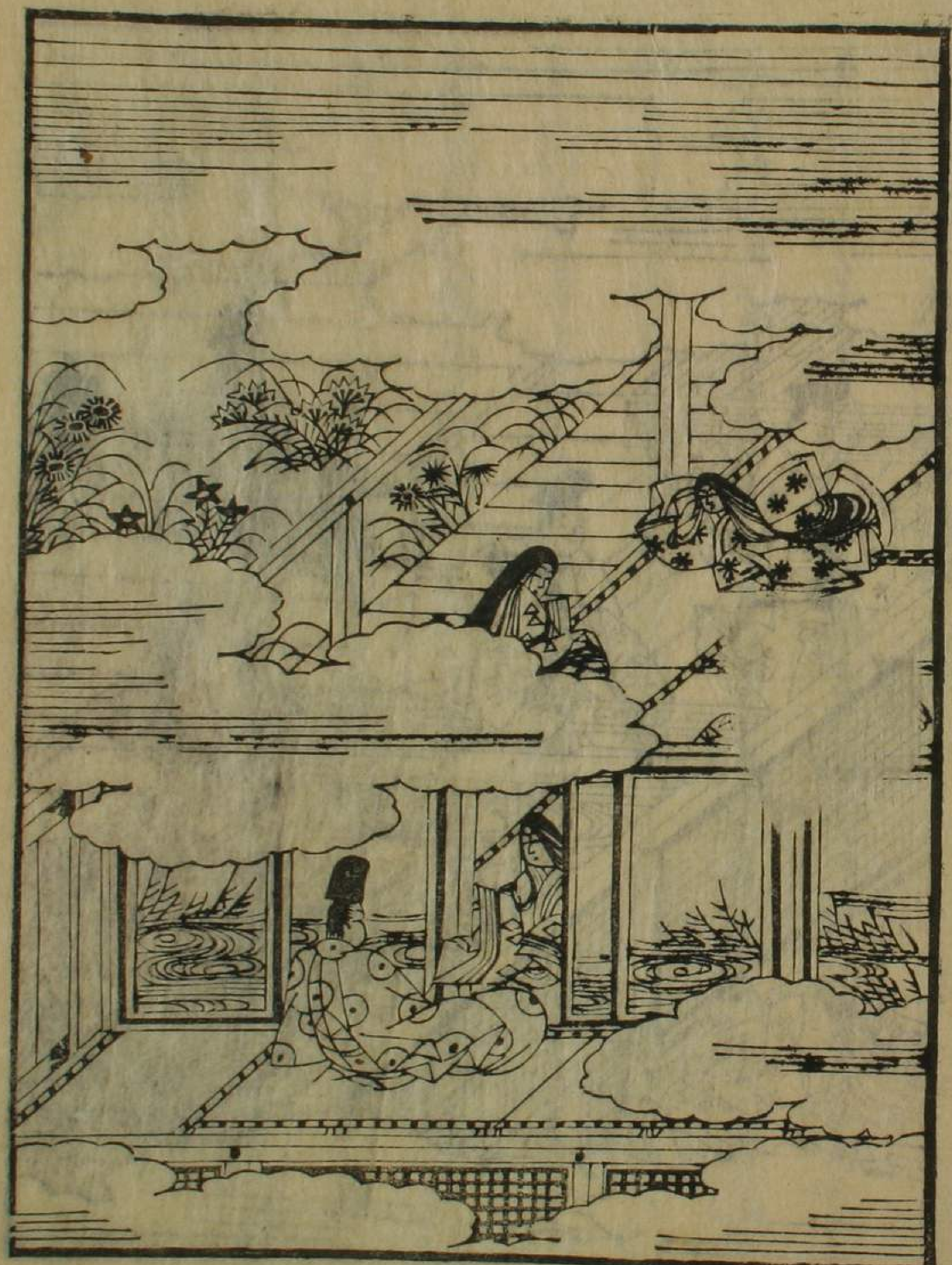
花乃香ハちりにし枝にとまらねとうつらん
袖にあさくしまめやこうてん御かへりのつかひにさ
めようのさうそくたまハりて梅をえたりおれ
しくむすひたるにそのさいもすこしふかき
せられけれハ源氏
花のえにいとゝ心をしむるかな人のとかめん
かをハつゝめとけつこうハ御くふあはせまつる
ともこゝろに給ひてハつくりしてや給ひてこそ
おくらしてまゐらせ給ひ殊の上にもあきらかに
こゝせまうすたよ梅枝もあり花ちる里ハかへう

のかう明石といくのえうりのかうお亦浪乃ハ
らうかう也けるにうりあまためしく右部少の文
よこれまいせ給へとて給ひてまふうしやうるし
きちんしやるまとて見ひうちあまくをいさうの
とう侍わらてちんし給へり大夜のまゐんちは
の中将弁の君なとも本その御あそひのうち
すうしふ笛まも梅まあそせてまつるとめし
とうみて御ことを琴めして御あそひあり秋
更くれうけまつふ子母も思ひへしとて哀
うらひそ乃しゆやいしあくられん心さま

つる花のあかうする源氏
色もうもうつろふみふこの花さく宿
をうれしもあらまん給の中ね
うらひその弥へうれえさもうちいまてゐと
みきこへをせようの梅え行　さいしやう中ね
心あらて風のよくめる花の木よそりあらし
まてあまやよくとき弁のおね
うきてみふ月と花と侍まてすん弥了
のあるもかへるひを御し文のそりまふ御車へ
源氏の中まうれゆとやうえくひとくえうりまれ

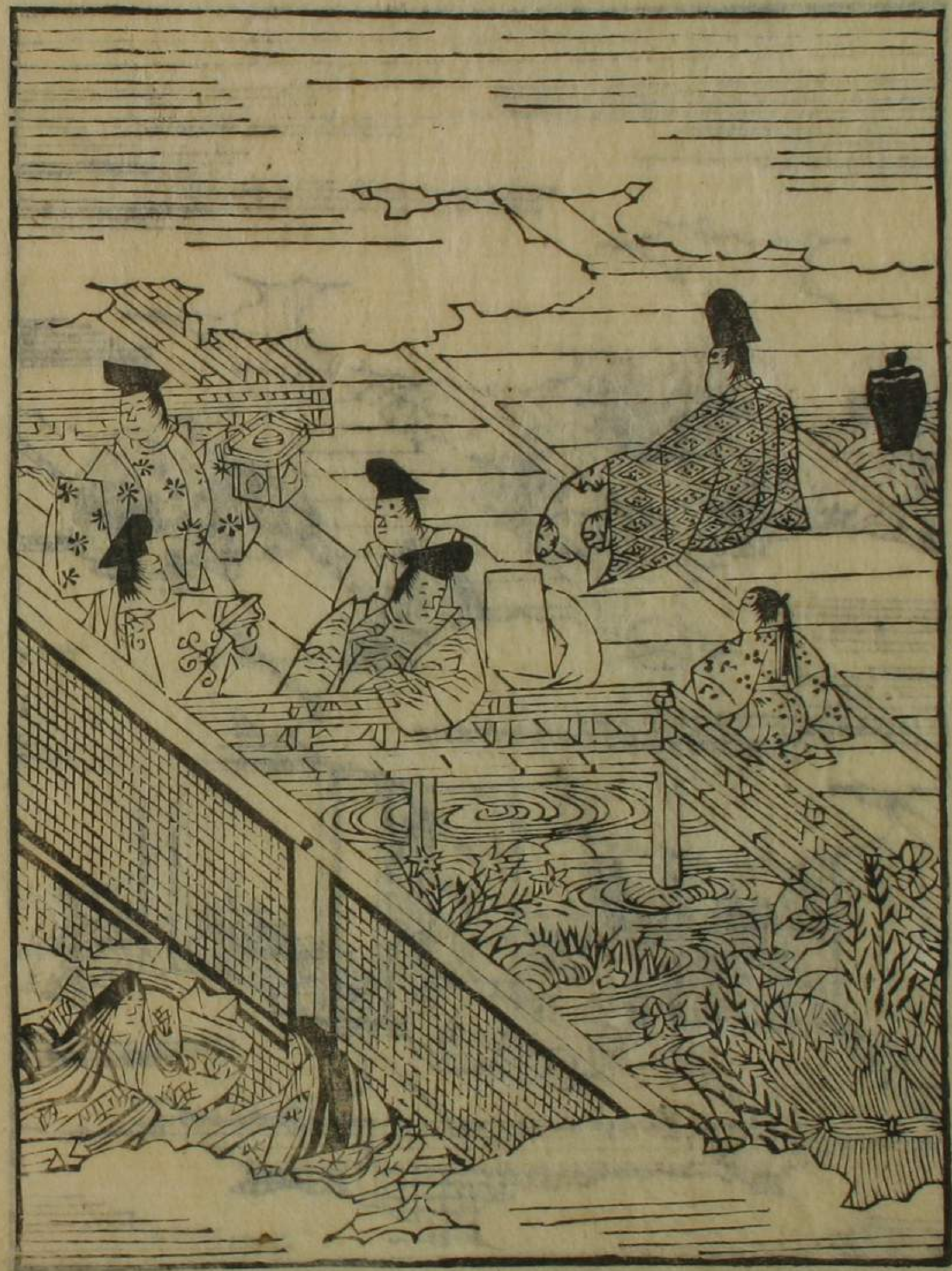
ぬたきおかさつかさへくきまりけるへ変
花の色えうぬ袖ようつしてもことあや
まうといまやとうらん　源氏
めつらしとふる里人もまちえんむの花さき
とまりて久しき君のやうの中にも夕きりに中将
のちりの花すみのこ思ひわくなるあひちかたり中
ねさん乃むとをんとのたまふちりしきてあひて
ちのおもしハれむまさりたる一めやうのきこめ
あきおもしもや井の房へれ文ありさ中ね
これきたうきせのつゝまたりかりとおもへれ

ぬ人やひとふとたる　姫君
かきかとて何されるをとわすれてもちや
よれまひく心かるらんとあるをあやしとうち
をかれそ見ぬ給ハ御ここ



十九 藤裏葉

さいしやう中将はれいさきのおとゝもあやうかりし
姫君もまたをさなきほどよりひとつにおひをね
ところのうちにもたかひにおもひかはしつゝいはん
とおもひしよりてきくつゝそとめなきよ
卯月藤の花のえんしまひてくれゆく程
おもしろくより宰相の中将へ御文あり内大臣
わかやどの藤の色こきたそかれにたづねやは
こぬ春のなごりをとありさいしやう中将
中々に折やまどはむ藤の花たそかれ



こときのことくしにはいみしうはまさりし
てあそひけれはかたはらにほひけるとむかしは
まらうとはこゝろはせあらてたかうへしけり
物まゐらするむかしは物かへりきこえ
かたくもれのけしきしつりけれは春のならひ
ましてあさくらの花さえたにめおもしろなる
なかきをとりちらして心みなくちをしうなし
くみちゆくほとこの花のひとちらとられて夜
またきゆくえとあやしくて花をもちてお
けてあさことまつりけれはあけてにらは

まうくしき大臣かはなさかりにはちらんやは おほきおとゝ
たかきくゐらくをゆてたかき藤のかたえ栄ふると
うちよせし藤は花をともとめてみれは頼中お
花のえこく梅さくらなとをはしめてさまさまの
かきくらきまつみなさかりなりいさゝ白藤の
うちはなれしとけて春のをか秋もたのまんは
ゆへ是を藤のまことゝみて大臣
むかされはうとかしん藤の花をかはら
またてうとそうけまる うたよみたれは さいしやう
うまうまからしすらしきりにかへりけむさ

いとよしさいしやう中将

一　いとえうらうけき書状をくしきてされの
いもうとかたよりおくらん以の中将
　しゆやめの袖にあつて散の花ちる人こ
やまとものきんさて宰相中将とひめ君乃
こゝろみちゝいさまうその衣れはおそれおし
一　つきとらふさうてとこうまうし也ゆうらめんら

姫君

　あされる紙にゐのしたゝ川ちらはいひてゆる
さうせきのおくうきさいしやう中将

　かゝよまうくさ田のそれと門口のあさき
このゝへ御わせさしうらん志いよ知うらてあくら
もちうれのかゝされいちうらかたうあさいうき
おくうとあ給之り給て後給の行文よ
　さらむふよちのいよちりくうもしよめしにふ
めくらう袖のちゝくをうし月のつりうきかり
まうて氷もよぬ中するれい文おくしもゆやきく
見給これ乙つのむもそめれ武蔵のあくいけとし
しつ宰相の佐ちひ人るれをやみのゆりまさ
たゆくちきわ給すとてあうしてすちへし哭給

のちの日大やけにはつかひとみやうへは
内侍おうりいそき川原へ車にのりしめて名を
つけしおふひすれなりしを宰相中将
何とかやけふのかさしよかつ見つゝおほめくまて
もなりにけるかな　藤内侍のかへし
　かさしてもかつたとらるゝ草の名はかつらを
おりし人やしるらん　かつらをおりし人とは夕霧及第し給ひし事也　宰相は
此度中納言になり給ぬゆへその名をかへし藏
給ぬ。さてかのひめ君は是あのとあまれとさせ給ひ
しろを今まておはりつかくその代あのとを

かくて菊のうつろひたる一枝給ひて中納言
あさみとりわか葉の菊を露にてもこき
むらさきの色とかけきやからかりしおりの
乳母
二葉よりなたゝる園の菊なれはあさき
色わく露もなかりき　明石のひめ君は卯月
にまいり給ふへき御用意にてこしらへの程は
むらさきの上そひて給ひておはしまさ宮に
て御いと給ひて祇をりもとの所もみつのよ
ひとへしひ給ひけり也　源氏は是より太上天

皇にあり給ふ世尊寺ちんしのまへとおもうさか
ておはのみこの御位なり系図にある事とも
そおり中納言ハうちの大とやのきみ給ひし三
条人もとりて住のふむしのごとくみてうし一
むすきもんを海世てみられけりとつくる
花給ひ今わかうえし一村をむしのなれ
是けき歌もなりしにかりぬりあさ
あそ心ちしけはまきとゆきハ中納言
なれともハ世のあはれしらし人のゆくゑ
まうや宿のましめ　まことハ左京也　三条の上　雲井の庭なり

なき人の絹ふみしをつれすて心とめ
まつりし井の水おもて出しり給ひて紅葉
の交にかおもてまたくうけりまとわりつゝ
もゆらんして大臣
そのゝち老木にむかへともうらめしう一しめ
松もとをおひになり中納言の世れと
心ませもうけとれたのむ二条のあはれし
ひきせて松のものらて所去月よ三条の院へ切
春ありこれハ源氏末年よりちるまでもあり給は
昔人のかゝめ也　此歌ハ四十より五十年よ一度ていかにもまゝ常楽をさうの御てもちてうくし又新るとさし

此行幸も十月なれハその心也朱雀院も御
幸ありましてあそはしの院もゆかりいとゝみ
ことそろひしにさ成ちかくにしきとしく
かり舟にみの時うてをつむまゝれ御しそれ名
のつき乃流るゝのきすへくれ右の朱雀立そひ
きらきらしき月のそらなは似かりめつらしき
ゆかりとみるとも其てんまうりおもしまして宿
の御ゆらんせさせたまひしんうしの池よあれ
ありく鶴うひもめしあらつきれ小あるとも
もひかりしみのゆゑをかなは小野まちりつらする

る一はひさけさり左右のまけまいとや
こわらをもちてとんちんのひしより御おろ
おく御くしみれのもとひさまつりてそうとを太政大
臣の御はせをうけ給りてつかうまつりててうしておほのはま
いる　おものは（御膳也）　庭の面よりてらおしきわたしつの座
むとなき家の子ともあまたこしき抱もとめ
ふまひつ　公家のけまうり入御あらひまし
まつて御おまゐる御こともしもまうきんとん無詞
御文給まりのわんハつゐのとふくたまねく
ひき給梅の御おれすみちかしきとゑれハ中の

色〳〵をうつしてかつをひきてさせのへてて
きくゆらんとさせなり給ひんのつきの御とも
めすらくのかなしのちらぬしるを朱雀院も
あはれときこしめしてあはしの波にきく物せ給
て源氏のゑの青海波のまひをまひくは源氏
名をのこ向きのきくもおりくは神うら
けし秋をかうし給ひてそのおりは行幸
まさるかひし事をおもひいだす太政大臣
むかしの雲のうへまてきくのむかしに
きせのおりしそこそ朱雀院

秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝる紅葉の
をりをこそみね　法門

よのつねの紅葉とやみるいにしへのためし
にひける庭のにしきを此時源氏の御座を
院のくらゐをなすらへさせまゐるなり